

三階の家

室生犀星

青空文庫

三階の家は坂の中程にあつた。向う側は古い禪寺の杉の立木が道路の上へ覆いかかり、煉瓦造りの便所の上まで枝を垂れていた。こんな坂の中途に便所がどうして建っているのか。一寸不思議な気がする、——その便所の廂へ瓦斯燈がさびしく点れていた。

三階の一階は小間物屋を兼ねた店につづいて、造花屋があり、その隣は八百屋であつた。二階は全部何時も借手がなく、雨戸は閉されがちであつた。時たま、造花屋で大物の造花を拵える時に雨戸が開くくらいだつた。

三階の北側に日新聞の記者の松岡という男が住んでいたが、その隣の部屋は閉じたきりで、明いたことがない……そればかり

でなく、その隣の間も雨戸が閉ったままであつた。時々借手があ
るのだが、荷車が着いたかと思うと二三日すると直ぐに越して行
つた。家主はすぐ裏町の湯屋であつたが、今度は日曜だけを師団
の兵隊に貸すことにしていたが、それも三度ばかりで兵隊の方で
来なくなつたらしかつた。別に何の噂もなく極めて平凡な貸家だ
が、誰も落着かぬらしかつた。

一階のはずれは八百屋が三辻の角になり、遊廓ゆうかくへ這入る口で
あつた。造花屋は坂の上にあたるので、穴蔵が仕組れ、八百屋が
使用していた。

H新聞の松岡は一人暮しで朝おそく起きると、すぐ内職の木炭
画の写真肖像を描くのだったが、職しよく掌しょう柄がら、師団の方の戦死

将校の肖像を引受けていて、部屋じゆう肖像画だらけであった。北側のうすぐらい部屋の中に生白い戦死将校の引延しの肖像画が架けられて、留守中に這入った造花屋の主婦は、慌てて部屋を出た程であった。

松岡は外出の時は必らず一枚ずつの肖像画を風呂敷に包んで出かけた。必ずフロックを着て黒の山^{やまたか}高をかむっていた。坂を上りつめると大きな鉄橋だった。H新聞記者松岡正の人並^{すぐ}勝れた風^ふ采^{うさい}は、誰が値踏みしても地方裁判所の首席判事くらいに見えた。或いはそれ以上かも知れない。かれは警察と市役所とを廻ると原稿を書いて四時頃に帰宅した。

別に何処^{どこ}へ行くということもなく、社からかえると肖像画を書

くくらいが仕事であつた。造花屋や小間物屋の受けもよかつた。食事は造花屋でこしらえていたが、晩食だけであつた。夜もおそくまで画架ががに向つてゐるらしく能く造花屋の主婦は、三階から小用に降りてくる松岡の足音をきいた。三階から二階へ下りてくる松岡は静かに足音をしのばせて、穴蔵のすぐ横のはばかりへ這入るのであつた。主婦はそんな時には決して納戸の方から声をかけて見るのだった。

「まだ御勉強ですか？」

「そろそろ止そうかと思つてゐるんです。何時ごろでしようか。」

松岡は決きつと時計を持つてゐるくせにそう言つて、ことりことりと長い階段を上つて行くのだった。新聞社の収入と肖像画の収

入を合せると、相応な金になるらしかったが、別に遊びに出かけることもないので、相当な貯蓄があるらしいと言われていた。訪ねて来る人もなければ何日夕方から食事に出かけたこともなかった。

唯、^{ただ}非常な潔癖で、身なりを作ることが道楽らしかった。いつでも黒の山高をきちんと冠^{かむ}つて、洋杖^{ステッキ}を小脇にはさんで橋の上を歩いて行くのだったが、妙に蒼白い皮膚と、痩せた肩つきとが際立って見え、朝日に影を惹^ひいた姿は妙にさびしかった。

唯の一度、夕方おそく駅の人力車に乗った女客が、造花屋の店さきに下りたが、主婦は女客の顔色が汽車に揺られた疲れと度端^{どはず}れの昂奮^{こうふん}との為^ためにがちがち顫^{ふる}える指さきを見た。

「何時もならもうおかえりのところでございますが、お上りになつてお待ちなすつたら直ぐでございます。」

主婦はそう言つておどおどしている女客の浅ぐろい顔を見たが、妙に浅ぐろいために何か可憐な可愛げかわいのある顔つきであつた。その容子ようすでは決してすれっからしの女でないことや、結婚したにしてもほんの暫しばらく、半年くらいしか男にふれないようなところがあつた。主婦は直覺的に松岡と關係のある女だと思つたが、松岡が越して来てから四ヶ月くらいしか経たなかつたので、主婦は何か解つたような気がした。「とにかく、永いことお待ちなさらなくともようございますよ。」

女客はおろおろした声で言つた。

「でもわたくしお待ちしてもようございますかしら。」

「さあ、——」主婦は女客の顔を見成みまもった。

「でも能くござんじじやないんですか、ござんじなら……」

「ええ、それはよくぞんじているんですけれど……」

女客は曖昧に言った。

「それなら関かまわれないじゃありませんか？ おあがりなさいましよ

」。

主婦は女客を三階へ案内しながら、長い階段を上った。

「御家内の方でございますか、奥様でいらつしやるのだと、わたくし存じあげているんですけれど……」主婦はそう言つて女客をちらと偷ぬすみ見たが、女客は低い声でこたえた。

「すこし事情がございました、何でございます……」

「はあ、……」

主婦は松岡の部屋の戸をあけた。書きかけの肖像画が気味わるく四方の壁に架けられていた。主婦はあたりを片づけて女客を坐らせた。

「ではお休みなさいまし。」

主婦が去ってしまうと、女客はぼかんと坐りながら気ぬけのしたような格好で、見るともなく肖像画に見入っていたが、何時の間にかしくしく泣き出していた。そして永い間、坐ったままであった。

向いの寺の銚ほこすぎ杉に風が鳴り出して、まだ明りの漂うている部

屋の中に何の物音もなかった。女は手鏡で顔のつくりをなおしかかると、二階あたりの階段をみしりみしりと上ってくるものがあった。いつもの松岡正は最つと静かな歩調だったが、きようはその足音には故意わざとらしい感情があらわれ、二足三足と何か考えているようであった。

女はその足音に何気なく注意したが、ほんの一秒間位の間に、すっかり蒼くなるほど皮膚が褪さめた色になった。そして三階の階段にかかった足音を耳に入れると、女の手さきは小さい包みを有もつたまま、すこしずつ瘥ふえはじめた。その表情は息を窒つめたような緊張で、皮膚そのものが紙のようにぱりぱりしているように見えた。

足音が三階の階段を上りつめると、女は殆ど倒れるような一種の眩惑しそうな眼付で、沈んだ昂奮のために前のめりになり、やっと畳の上に手を置いて手を支えるのだった。足音は襖の前に止ったが、襖は迂りよくむしろ何気なく開いたような様子だった。女は肩さきを斬られたように驚いて、冷汗を掻いて仰向いた。

松岡正は入口で女のことを聞いたものらしく、冷然と澄し返って黙って、壁の方へ行つて上着を脱いだ。女は黙つてうつ向いてるだけだった。松岡は明らかな不愉快さを表情にうかべると、表の障子を勢よく、あまりに勢よく開けたのだった。寺の境内が見渡されるのだが、何かの忌日で赤い流れ旗が一ながれ夕やみの中によどんで見えた。松岡はズボンを脱いで、和服に着かえると

手拭を下げて又長い階段を降りて行つた。そのスリツパの音がきゆつと皮砥かわどのように鳴つていた。

女はうつ向いたきりであつた。それは一生懸命にうつ向いていようであつた。松岡が這入つて来て、煙草たばこをくわえたまま、ひどく高びしやな調子で突つかかつた。

「何時来た？」

女はうなじをぴりとうごかした。そして漸やっと顔を擡もたげると、ひどく感動して声の出ない掠かすれた声音で言つた。

「三十分ほどさきに参つたのでございます。」

「三十分程前に？——どうしてそんな氣になつたのだ。おれは別にお前を呼びはしないんだが……」

「わたくし、ちよつとお話をしたいことがございましたから突然
まいったのですけれど……」女は言葉を切った。「わるいと思
っていたのでございます。」

「悪いと思ったらなぜ来たんだ。おれは忙しいんだ。」

「それはもう……」

「では用事というのは何なんだ、それから聞きたいが……」

「べつに改めて何んでございますけれど、それに言いにくうも
ございますし……」

「何を言っているんだ。」

松岡は吸殻を噛んで棄てると、忌いまいま々しそうに焦じれついて、舌
打ちをした。女の眼は謝まっているようなおどおどしさに取紛れ

て、そして急に物が言えそうもなかった。その慌てたところへの浅ぐろい色の女の可愛らしさが、いじけて、優しくしなえて見えた。松岡の眼付は惨虐にそのしなえた優しさを踏みしだいて、
睨にらんでいた。

「おれの方から知らせるまで控えてくれるようにあれほど頼んで置いた、それをお前は勝手にやって来たのだ、おれはそういうこととは嫌いなんだ、おれは仕事もやつと眼鼻がついてどうやらうまく行きそうなところへ、また邪魔をしてお前はやって来たのだ。」
「それはきつとお叱りを受けるだろうとは思っていたのですけれど、もう永い間、お目にかかりませず……」

「お目にかかりませずか……」

松岡はまた舌打ちをして女の氣勢を挫くじいてしまった。「そんないい加減な文句をつけて来られてたまるものか？ それに先さきに前触れをして来るのならまだいいが、大ぴらで能く来られたものだ。」

女は黙って俯向いていた。頸くびは顔色の浅あぐろいのに似合あわず、白く、静かな肥りを小ぢんまりと伸べていた。しかし松岡正の眼にはそういう頸すじなぞ眼に止らないで、むしろ憎々しげに見下ろしたのだった。

「それでどうする気なんだ、勝手に上り込んでしまって、——」
松岡はすぐにも出て行けがしに言った。そして急に思い出して、
「俵も返してしまったじゃないか？」

「ええ、わたくし、どうしようかと迷っていたのですけれど、車ならお目にかかった上で……」

「また呼べると言うのだろう。」

「え、そうおもうたものでございますから。」

「何しろお前には辛抱というものができないらしいんだ。とにかく食事はまだしないのだろうから……」

松岡は階下へ立とうとした。一いっそう、怒ったような顔貌だった。女は慌てて松岡を止めるようにした。

「わたくしなら汽車の中でいただいたのですから、かまわないで下さいまし。あなたはまだ召しあがらないのならどうぞ。」

「おれならいいよ、それに今夜じゅうの仕ごがあるんだ。明日

中にとどける約束のものがあつてね。」

女は仕方なしに「ではお暇いとましますわ、お邪魔でございましたようし……」

しかし女の顔には別に毒念のない、平淡さがあつた。

「そしてお前はどこへ行くのだ、いまから一人で……」

「近くに宿屋でもございましたようから、そちらへ参つて居ります、でも此処ここでは何んですから。」

「そうか、それで明日また遣つて来る気かい。」

「あの……」

女は先刻から耐えていて持ち切れなくて、眼に一杯なみだ涙をうかべた。そして直ぐうつ向いて手ハンカチ帛をあてた。

「あ、耐らん、すぐそれだ。」

松岡は黄色い萎しなびた声でそういうと、突然頭の毛の中へ指を入れて、髪の毛をくしゃくしゃにした。「みんな日限の仕事になっているのだ、明日から又台なしだ。」松岡はそういうと、どかりとうしろ向きに寝ころんで、何か奇声を発した。平常の気取ったフロツク姿の松岡らしくもない、松岡であつた。

「それではわたくし帰ることにいたします、わたくし何もぞんじませんでしたものですから……」

女はそういうと、もじもじして包みを手に取つたが、中から菓子折を出すと壁ぎわへ押し遣つた。松岡はそおつと起き上ると、暗い表の障子をこんどは静かに閉めた。寺の境内から虫の音が一ひ

とかたまりになって、聞えた。松岡は菓子折に目も呉れなかつた。冷たい、^{はさみ}鋏のような眼付で女を依然高びしやに打眺めた。

「それで歩いて行くか、——」

「そとで俵を見つけて乗ることにいたします、近くに俵宿がございますでしょうか？」

たつたそれだけでも松岡の機嫌を取る言葉づかいだったが、松岡にはそんなことが感じられなさそうであつた。

「橋を渡るとぶらぶら歩いている車はある。」

「では御邪魔をいたしました。」

「……………」

松岡は襖をあけて出る女の姿を見ないようにしたが、女が階段

を下りると足音をぎしぎしと寧ろ静かすぎる程度で聞き澄した。にも関わらず疑いぶかく足音の消えた時分に襖のそとへ出て、階段の方をそつと窺うた。暗い廊下のとつっきの階段には灯がなく、また、その幾つも廊下の途中にある部屋がみんな明いているので、明りらしいものなぞ無かった。それに二階は全部明いているのだ。六つある部屋には一つも電燈がついていない。——しかし女はたしかに二階へ下りてゆき、階下で造花屋の主婦と何か話しているらしかった。松岡はそれを聞きすますと自分の部屋へ取って返して、茫乎ほんやりと時を過した。その内に木炭をカンワスになすり始めた。或る将校夫人の肖像だったがその写真を引き伸しながら描いているうちに、何時の間にかたてに長くなるような気がしてなら

なかった。松岡は電燈の位置を変えた。それでうまく行つて時間の経つことも知らなかった。

「しかし……」

松岡は突然に真青な顔つきになり、木炭をカンワスから離れた。たしかに帰るときに階段を下りて行き、主婦と話していた声がかきこえたのだ、松岡は何度もこう思うたのだ。だったが、もう筆が進まなかった。松岡はズボンのかくしをさぐつて時計を見たが、十一時を八分過ぎて止っていた。それを振ると又カチカチ動いた。

寺の前の往来の人も行き静まって、造花屋の店明りの電燈も何時ものように街路を明るく射していなかった。よほど遅いと見える、こんなに早く時間が経ったかと思議に思われる。

松岡は手さぐりで階段を下り、二階から階下まで行って小用を足したが、主婦は寝そびれたこえで、

「松岡さんですか？」

と言った。

森^{しん}としていた。

「え……」松岡はいつもの癖でこう言つて尋ねた。

「何時ころですか。」

「さあ、さツキ十二時を打つたのを聞きましたが一時ころでしょうね。」

松岡はその声をうしろに聞いて、階段を上りはじめたが、そんなに経つかなと思ひ、時間の経つのが早いと考えた。しかし、い

つもの松岡は四時には帰っていたが、きようは遅くなつて五時半だつたことを思い出し、そうかなと思つた。

二階を上りつめると、往来へのおつつきガラスあまどの硝子雨戸が、鉄橋の電燈の余映でほのあか灰明ほのあかるかつた、いつも見るのだつたが、今夜はそれがわけて際立つて灰明ほのあかるかつた感じであつたが、その腰硝子を横の方へ、北側の部屋の方へ何かかげが動いたように思われたが、よくあることで莫迦ばかなと思つた。しかし何か量かさのある物かげであつた。誇張して言つたら人かげであつたかも知れない、——もう一步、進んでいうとその北側へ逸のがれた逃げ方、かげの動き方が非常にのろかつたのが、松岡にもふしぎに思われた。

「まさか?——」

松岡はそうも思うた。

三階へぎしぎし上りはじめた。

そして自分の部屋へ這入ると初めて先刻の影が或る幽かすかな物音を引いていたことを瞭はつきり乎乎と思ひ出した。廊下の坂の上にとまつた埃とも砂とも云えない細かなざらざらしたものの上を、強く、踏んで引いた一種のすれた物音であつた。物音というよりも、どう言つたらいいか、西洋紙を幾枚も重ねたのを上の方の一枚を引いた、ああいう幽かな物音であつた。

「あの部屋は明いているのだが、造花の枝や紙の型なぞを束ねて積んであるらしい。するとそれが何かにすれた音だったかも知れない——」

昼間無理をして積んだのが夜になって、湿ったためにしなえてその一部がくずれたのかも知れぬ、松岡はそう思うとそういうこともあることに気づいた。しかし、それはそれにしても何かかげのようなものの、横の方へ幅びろく、うつ向いて通りすぎたのはいつ一たい何だろう、松岡がそう考えたとき、五六十本ばかりの針の尖端で襟元を突かれたような、一時的ではあつたが非常な悪寒が、ぞつくりと通りすぎることを感じて、或る震えをおぼえた。

かれは襖をあけ、そとの廊下を神経的にあけて見たが、何も変わったことがある筈がなかった。これまでも松岡だけは何の不思議も気味わるさもこの三階では感じなかった。他のいろいろの人が越すごとに寧ろ可笑おかしかつたくらいだった。八百屋の主人も、

造花屋も松岡がいてくれるので、何より安堵していたのだった。松岡自身も曾かつて変な気のすることはなかった。唯の一度も無いと言つていい、――

しかし今夜は何か絶えず気が昂たかぶつて居るのは、松岡には女が来て行つたことに原因していることに気がついていたのだが……
…こんなにも廊下へ出て見る気や、悪寒や、胸の悸どきつくことや、喉の乾くことなぞ一度も経験したことがなかった。他から様々なこの三階の家の噂を聴くごとに寧ろ松岡は鼻であしらつていたのだ。松岡は襖戸を閉めて部屋へ這入ろうとする時に、鈍いぱたんという音をきいた。二階から三階への上り口から抜けて来る音であった、何か立てかけたものが不意に倒れたそれで、床板にひびい

たのであるらしい。たしかに二階で、廊下の板の上にちがいないとそう思った。今頃そんな音がしたことがない、鼠にしては大きい過ぎる音であった。

松岡はまた先刻の横に幅のひろい、何かがかが踏んで逃げたような物かげを不ふ図と思い出して見た。

「二階も北側のはずれだ、ちようどおれの部屋の階下にちがいない。」

松岡はまた身ぶるいした。

松岡は寢床の中へ這入ったが、寢つけそうもなかった。先刻、女を素そ気っけなく、ああまで素気なくしなくともよかつたと思うたが、同時に昼間八時間も汽船にゆすられて来た女の、汽船ではいつも

女が悪く胸気を嘔かれて苦しがることも、（おおかた大方きようもさん
ざん船の中で苦しがつていたことは、浅ぐろい皮膚の下に覗く紅
味が少しもないことで解つていた。）又思い出すともなく考え出
した。あの女はあのまま歸つたに違いないが、しかし、ああやつ
て階下の主婦にまで会いながら、殆ど三十分も経たない内にすご
すごと歸つて行つたのが松岡には余りいい気もちがしなかつた。
しかし、松岡は女から隔はなれる気もちで、出来るだけの素気ない冷
淡さをよそわねばならぬと思つた。

松岡はうつらうつらした時分に急に誰かが襖のそとに佇たつてい
るような気がした、そして起き上ると、曾つて一度も覺えたこと
のない恐怖に充ちた気もちで、襖のそとを窺うた。誰かが佇つて

呼吸をしている、すくなくとも或る量のある肉体が、襖一枚の外にどっしりと、暗みを浴びながら部屋の内側を圧しているような気がして、息苦しいばかりの静かさであつた。

「誰だ、」

松岡は神経的に黄ろい声で叫んで、襖をがらりと開けたが、誰も立っていないかつた。松岡は廊下へ出た。

二階からの上り口へ何かぼんやりと明るみが浮いていた。

「あの明りは小窓からさしてくる明りだ、いつも気づかないのだ。とにかく三階の部屋を一通り見廻つてやろう、どうもそうしないと寝られない。」

松岡は一つ一つの部屋を見廻つてあるいていくと、末枯れどき

のうそ寒さが慄々ぞくぞくと肌身に沁みついた、からだが震えて止りそうもなかった。幾度もくもの巢で顔を撫でられたが、そのたびに松岡は股から逆に水を浴びたような気がした。

松岡が階段の上の板の間に出たとき、突然、造花屋の主婦の聲が鋭く階段口から叫ばれた。

「誰方どなたですか。いまごろ——」

寢床から起き上って叫んだような声であった。

「僕です。」

「どうしたんです。」

「実はちよつと何で……見廻っているのですが。」

階下は森とした。

「わたくしも先刻から二階にどうも足音がしているような気がして、冴えて、ねむれないんですよ、そしたらあなたがまだ起きていらつしやるんですもの、それでやっと吻ほっとしたのですが……」

主婦は起き上ったような声で、大声で、誰かにあてつけたように言った。「しかし、わたくし考えますには、足音は三階ではなく二階の方でございましたよ、あなたの足音とは違う足音です。」
松岡がぞつとした。

「僕も二階のような気がしたんです、ちょうど僕の部屋の下の方のようにした、誰かが歩いているような……たしか、あそこに造花の道具類が積んであった筈でしたね、あれが崩れたような音がしましたよ、十一時ころに、——」

主婦はすぐ階下の上り口へ立って来たらしかった。

「え、そう、たしか十一時ころですわ、わたくしもその物音をきいたんですよ、造花はほんの紙型だけなんです、くずれるほどは有りません。」

「おかしいな」

松岡はしかし例のもの影を口へ出かかっていたが、なぜか言う気がしなかった。

「変ですね、よほど、しっかりした音なんですもの。」

主婦はそう言いながら二階へ上ろうとしなかった。

「今夜のようなことは、これまで一度もなかったのですからね、ひよっとすると鼠かも知れない——」

「え、そりや、ねずみかも知れませんが、それにしちや……」

松岡は寒さで膝のあたりががくがく喰いちがいになるほど、震えて仕方がなかった。主婦は云った。

「おついでに些ちよつと一と廻りしてくださいませんか、わたくし何だか寒気がしてならないんですから。」

「え、しかし厭だな。」

松岡は二階へ下りる気がしなかった。真暗な口を開いている階段の下から抜ける、雨戸漏れの空気のゆらぎが一層いっそう冷たく脇の下を通りすぎた。

「しかし何んでもないんでしょう、見廻るほどのことも無い——」
松岡は部屋の方へかえろうとしたが、主婦はまた言った。

「何んでもないんでしようが、一寸、お廻りくださいませんか？」
松岡は黙って立ち竦んだ。

しんと虫のこえがした。

「わたくしも安心してねむれるんですもの。」

「厭だな。」

「そんなことを仰おっしゃ有らないで見廻ってくださいな。」

「何んでもないんですよ、あれから後に何も物音がしないじやありませんか。」

松岡は耳をすました。

「そりや、そうですね、こんな晩には見廻って置いた方がよ
うございますからね、安心ができますから。」

「あなたが廻ったらどうです、ばかに此処は寒い。」

「でもあなたは男の方じゃありませんか、そんな弱い……」

松岡は実際、二階へ下りる気がしなかった。唯、なにか知ら^し厭な気がして、滅^{めい}入り込んで、考えるだけでもげっそりと痩せるような気がした。

「僕はもう寝ますよ。」

「そんなことを仰有らないで一寸下りて入らしてください」
「……」

「厭だな、」

「ではご一緒に廻って頂けませんか、その方がよごぎいます。」

「災難だな、」

松岡は二階へめしめしと階段を下りはじめた。階下からも主婦がめしめし上つて来たのだった。

「でも一晩じゆう寝つかれないよりも、見廻った方がいい気もちですよ。」

主婦は松岡と二階で落ち合うと、二人とも立ち止った。通りの雨戸からの明りがぼんぼりのように仄明るく浮いて見え、松岡はさむかった。

「たしかに二階でしたよ。」

主婦は同じことを言つて、まじまじと松岡の顔を見成つた。松岡は立つたまま、先きに行く気がしなかつた。蠟燭ろうそくを手に持った主婦の顔が片明りで悪鬼のように、あぶらぐんで見えた。

「さむくなりましたね。」

「ええ。」

使わない部屋はどの部屋もぎらついて、げじげじ虫が踵に這い込んでいようやうで気味わるかつた。納屋がわりの六畳の間でころぎが一疋^{びき}、畳の上を飛んでそれにも松岡はぎつくりした。「こんなところへ能く這入り込んだものですね。」主婦は気味わるそうにこおろぎを見すえたが、蠟燭の火かげで大きい暗いかげが一緒に動いていた。

「あなたのお部屋の下でしたよ、物音のしたのは？」

「僕もそう思うんですが、しかし……」

松岡はその部屋へ這入るのが、何故か厭だつた。それに不思議

な胸騒ぎが先刻から間断なくして、主婦に見られるのも工合のわるい程、総身がふるえて仕方がなかつた。廊下で主婦はふと皮肉めいた顔かおつき付で、松岡を見成りながら言つた。

「奥さまはよくお寝やすみになれますね。」

「奥さまつて？」松岡は驚いて蒼くなつた。

「夕方、いらしたじやありませんか？ あの方は奥さまなんでしょう、美しい優しい方じやありませんか？」

「あれは帰つた筈です、あれから間もなく用事ができましたね。」
「いいえ、お帰りになりはしませんよ、階下にはちやんとお召しものがあるんですもの。」

松岡は頭がぐらぐらとして、後脳が斬り取られたように軽い感

覚の無い眩惑を感じた。

「それは本統ほんとうですか。」

松岡は主婦の顔を睨むような眼附で、わなわなと顫えた。

「でも、あれから一度も階下へお下りにならないんですもの。わたくしお食事の時も気がついていたんですけれど、却って何んだと思ひましてね。」

「実は……」松岡は喉の掠れた声で言った。

「あれから間もなく帰ったんですよ、すこし用事があつたので、

——履きものがあるというのは、本統のことですか。」

「じゃ、階下へ行つてごらんなさいまし。それにしてもお帰りになつたとすると……わたくし、ずっと階下にいましたから気づか

ないことはない筈ですがね。」

「とにかく僕は履き物を見て来る、——」

松岡は蒼くなりながら急いで階段を下りて行き、すぐ上り口に脱いである籐表の、うす紫の緒のある女の履物を見たが、それは、夕方帰って来たときに見た女の履物に違いはなかった。位置もすこしも変っていないようであった。

「まだ帰らない、——とすると、いったい体どこにいるのだろう。」

松岡はがたがた震えながら階段を上ると、上り口に主婦はこれも夜ふけの青い顔をして立っていた。

「ございましたでしょう。」

「ありました。」

「たしかにおかえりになったんですか、それとも……」

「たしかに帰ったのです。階下で女の話声までしたと思つたのは、聞きちがいをしたのだな。」

松岡はいまから思うと、話し声はどうも女の声だと思われなかつた。

「すると何処にいらつしやるのでしよう、変ですね。」

「かえらないとすると……」松岡は冷たくなつて了^{しま}つた。

「何か言い争いでもなすつたのですか。」

主婦は不安げな顔附で、松岡の顔をまじまじに打眺^{なが}め乍^なら、何かの予感で唇を少し震わせて言つた。

「え、すこしね、込み入つた事情がありましたね。」

「しかし変ですね。」

主婦は造花の道具部屋の前に立ちながら、ふと、

「こんな事を言つては何んですが、言い争いをなすつたとすると……」主婦は喉が乾いたようにがくがくさせた。

「それに鬱ふさいでいらしたんですか、へいぜいから陰気な方でしたか知ら？」

「いくらかその方ですね。」

主婦はとにかくこの部屋を見ましようと言つた。

「ちようど此処はあなたのお部屋の下にあたります。」

そう又言つたが、松岡は胸さわぎで、わくわくして部屋の戸があけられなかつた。主婦はいきなり襖の戸をあけたが、中はしん

として別に異常もなかった。松岡はほつとして思わず言った。

「あいつ、短気なことをしやしなかつたかと、この部屋を覗くまで安心ができませんでしたよ。それにしても一たい何処へ行ったんだろう、下駄を穿はき違えたものらしいんですね。」

「そう思うより外に考えようはありませんね、どこにも居らつしやらないとしますとね。」

松岡は欠伸あくびを一つした。

「やすみましよう、莫迦々々しい。」

「でも、ようございました。もしものことがあつたりしますとあ
とが厭いとでございましたからね。」

「まさか、そんな奴ならいいんだが……」

松岡は冷笑して見せた。

「あんな美しい方をそんなに仰有るものじゃありませんよ、ずっと御一緒だったのですか。」

「すこし訳があつて別れたんですが、時々ああして出て来てはうるさくて仕方がないんです。」

「でもお一人では御不自由でしょうから一緒におなりになったらどうです。」

松岡は黙つて鼻さきで笑つていた。二人は三階へ上る階段に立つていたが、主婦はその時、急に居竦いすくんで、松岡の手首をうしろから引いた。松岡は驚いて振りかえると、主婦は階段の下を指さした。松岡は蠟燭の火かげで、ずるずると長い影を引いたものが、

階段裏からくびれているのを目に入れた。女の顔は向うむきに隠れていた。動かず凝^じ乎^っとしていた。

「あの方ですよ。」

主婦はぶるぶる震えた。

「やはり帰らなかつたのだな。」

松岡は紙のように蒼くなり、へた張った主婦を足もとに見て、その長い姿を天井裏に仰いだ。

「悪いことをした。」

松岡は始めてそう謝まるような声音で独り言をしたが、からだ
が硬張^{こわば}って動かれなかつた。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 室生犀星集 童子」ちくま文庫、筑摩書房

2008（平成20）年9月10日第1刷発行

底本の親本：「室生犀星未刊行作品集 第2巻 大正※」[#ロ―
△数字2、1-13-22] 三弥井書店

1987（昭和62）年5月28日

初出：「苦楽」

1926（大正15）年12月号

入力：門田裕志

校正：岡村和彦

2013年8月20日作成

2013年10月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三階の家

室生犀星

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>